

令和7年度 直方市総合教育会議 会議録 (要点筆記)

1. 開会及び閉会に関する事項

(1) 日 時 令和7年4月30日(水曜日)

開 会 15時00分

閉 会 16時21分

(2) 場 所 直方市役所 5階 503・504 会議室

2. 出席者及び欠席委員の氏名

(1) 出席者

直 方 市 長 大塚 進弘

直 方 市 教 育 長 山本 栄司

直 方 市 教 育 委 員 篠田 尊徳

直 方 市 教 育 委 員 中野 昭子

直 方 市 教 育 委 員 阿部 英子

直 方 市 教 育 委 員 内藤 誠治

(2) 欠席者

なし

3. 会議に出席した者の氏名

事務局

教 育 部 長 宇山 裕之

企 画 経 営 課 長 芦原 昌行

財 政 課 長 高松 幸一

教 育 総 務 課 長 石橋 剛

学 校 教 育 課 長 林 教司

学 校 教 育 係 長 守田 雄樹

文化・スポーツ推進課長 船越 健児

社 会 教 育 係 長 角田 元

社 会 教 育 係 高橋 龍之介

教 育 総 務 係 長 天野 浩輔

教 育 総 務 係 瓜生 怜子 (書記)

4. 会議式次第

○開会

・大塚市長あいさつ

令和5年度の総合教育会議で、家庭等における読書の問題や図書館の活用についてのご意見をいただいていた。そうした意味で、現在、ユメニティのおがたと合わせて図書館の改修等を予定している中で、総合教育会議のテーマとして、改修あるいはこれからの事業の展開にあたって、どうあったらいいのかということの意見を聞いておく必要があるということが一点と、もう一点は、未来を担う子どもたちに海外体験をしてもらうことは極めて重要という私の思いもあり、昨年度、市内の中学生をフィンランドに初めて海外派遣した。結果としては、報告会に参加をさせていただいたが、非常に子どもたちの目の輝きが変わったなど。ある意味では次代を担う子どもたちに良い機会が提供できたのではないかと思った。生徒全員にそういう機会を設けることはできないが、意欲ある子どもたちにそういう機会を与えていくことは極めて重要だと認識をした。しかし、アントレプレナーシップ教育、要するに起業家精神みたいなものというような建て付けからいくと、どの世代で行った方がいいのかという問題意識があり、令和7年度については、対象を高校生まで広げることとしている。そうした中で、市長部局として、どういう形でそこをうまくバックアップしていったらいいのか、委員の皆様方から忌憚のない意見をいただきたいと思っている。今日の総合教育会議ではある意味ではそういった観点から皆様方の意見を拝聴しながら、改めてまた教育委員会と連携をとって、子どもたちの未来を開くために、これからも努力していきたいと思っている。

○議事

議題「ユメニティのおがた及び直方市立図書館の大規模改修について」

(1) 改修概要及びコンセプトについて

- ・改修のコンセプト「人と学び、本と学び、居心地の良さを感じられる図書館」
- ・コンセプトにつなぐ新たな図書館サービス
- ・コンセプトにつなぐ内装リニューアル

※詳細は資料参照

【委員の意見】

中野委員 自動貸出機を導入するとあったが、紛失等の対応はどう考えているのか。また、飲食ができる場所はどこに設けるのか。車庫を書庫に転用することのだが、温度・湿度の管理等は考えているのか。SLを移設するのであれば、その場合はぜひ屋根をつけていただきたいのと、歴史コーナー（仮）の設置はいいことだが、来館者が来たくなくなるような設置の仕方はとても難しいと思

う。それを民間と一緒に盛上げていくというのは大切なことだが、
どういう団体に呼びかけられるのかというのは大事なことなので、ぜひそう
いうところからも市民参加を目指していただきたい。

船越課長 自動貸出機の導入に伴う持ち帰り等の対応については、すでに機械を導入し
ている先進事例があることから、導入に向け対処方法等の研究をしたいと考
えている。飲食のスペースについては、区分けを行い、限られたスペースで
行うことを想定している。また、車庫の書庫への転用については、必要な設
備を設置し、温度・湿度の管理を行う予定である。SLの移設に関しては、
まだ構想段階であることから、屋根の設置についてはご意見として承りたい。
市民参加については、市としても大事なことであり、関わって
いただく市民の方を増やしていきたいと考えている。歴史コーナー（仮）の
配架についても、いろいろな団体の意見を伺いながら進めていきたいと考
えている。今回の改修は、まずは来られていない方々にどうアプローチしてい
くかというのを考えながら進めていきたいと考えている。

中野委員 施設整備の基本方針に、アンケート調査を基に計画を行ったとの記載がある
が、いつ、どのような形で、何人ぐらいアンケートを行ったのか。

高橋 図書館の利用者の方々と、鞍手高校の生徒の皆さんを対象に昨年6月頃に
アンケートを実施した。利用者の方については、数が少なくて母数が少なく
なったが、鞍手高校の生徒の方には400名弱の回答をいただいている。

篠田委員 せっかく新しくするなら、一言でこんな図書館になりましたというキャッチ
フレーズがあった方がいいと思うが、どういう図書館に生まれ変わったか
ということを念頭に置いたキャッチフレーズを付ける考えはあるか。居場所づ
くりというコンセプトは大切なことだが、してはいけないことを緩和する
ということで、飲食のコーナーを限定するなどと考えられてはいるが、何をし
てもいいのが居場所という間違ったメッセージになってしまわないよう、し
っかりコンセプトを伝える必要があるのではないか。筑豊文庫について、現
在の資料室を多目的ルーム（仮）とし、新たに石炭記念館や筑豊文庫にある
貴重な資料の配架を行うとのことだが、筑豊文庫は研究している方からす
ると大事な資料ということも聞いている。そういう取り扱いとして、どうなの
か。

船越課長 1点目のキャッチフレーズについて、行政がなかなか苦手にしてるところで

あるが、一言でこういう図書館ですと言えるようなキャッチフレーズを考えて、リニューアルする際に発信できるような形で考えていきたい。居場所づくりについては、篠田委員がおっしゃるとおり、何をしてもいい空間にするということではなく、ある程度緩和をすることで、使いやすさを強調していきたいと思っている。その中でも守るべきマナー等があるので、その辺はバランスを取りながら、利用者の方に理解していただくように、しっかりと周知をしながら進めていきたいと考えている。静かにしたい方やグループで利用したい方など、それぞれの使い方があるので、サイレントルームといった形で分けをしながら整備をして、皆さんが気持ちよく利用できるような空間となるように進めていきたいと考えている。筑豊文庫について、確かに貴重な資料が非常に多くあるが、なかなか公開できる資料が少ない状況である。その中でも研究者の方には、かなり見に来ていただいているので、それは今後もそのまま研究に使っていただけるような形にして、あとは一般的にオープンにできる書架を整理して、縮小という形にはなるが、コーナーはしっかり維持した形で配架していきたいと考えている。

内藤委員 意見だが、非常に素晴らしいコンセプトで、具体的に考えられているが、これは誰のための施設なのかということを外さないでおいていただきたい。コンセプトの①「知りたい」「学びたい」を支える、②人と文化をつなぐ、③居場所づくり、④新たな出会いをつくるというのが並列になっているが、あくまでも①と②が主であって、③と④は従ということが図書館であるべきところではないか。本を読むとか知識を得るという過ごし方ならいいが、そうではない過ごし方をされている利用者もいらっしゃる。個人の意見としては、あくまでも①「知りたい」「学びを支える」、②人と文化をつなぐということが主であって、そこに多くの人たちに来ていただく手段として③と④があるというような感じなのかなというふうに思っている。こういうのができたら行きたくなるだろうなというふうに思うが、そういうことも考えながら進めていただきたい。

阿部委員 親子の憩いの場の近くに授乳室を持つてこられるというのは、小さいお子さんを連れて行きやすく、ありがたいことだと思う。書架の展示について、例えば熊本県の不知火図書館のように、天井までの背の高い書架にするのもたくさん配架ができていいと思うが、せっかく今回車庫を書庫にするのであれば、例えば、遠賀町の図書館は大人の背丈程度の高さの書架で、圧迫感がなくてとても過ごしやすかったなので、新しく書庫をつくるのであれば、あまり天井までの高い書架はどうなのかなと感じた。先ほどから何々してはいけな

いをなくすということが出ているが、食べることに関しては慎重に行った方がいいのではと思っている。公共の本なので綺麗に丁寧に大切に扱って欲しいので、そこに食べ物を持ってくると、ちょっと難くなるのではないかな。飲むことも公にいいですよというだけでも結構開放的だなと思うが、小中学校の図書室は静かにしないといけないし、飲食も駄目だと思う。今回、図書館の司書が小学校の図書館を回るという話があったが、図書室でどのように過ごすかというときに、あまり図書館と学校の図書室で違いが出ると、子どもたちがどう受け止めるか。司書が回られる前に、学校にはどういうふうに説明するのかなど、話し合っておく必要があるのではないかな。また、図書館の司書をされている方に今回の改修に伴って図書館側から意見があるのかを尋ねたところ、自分たちの意見は全部、図書館の館長に伝えているということだった。現時点で館長から意見が出ているのであれば教えていただきたい。

船越課長

まず、高い書架で圧迫感が出るのではないかということについて、今、考えているのは壁際のところだけ高い書架にして、この書架を書庫の一部のような形で、蔵書がたくさんあるように見せたいと考えているが、他市町村の図書館の事例を参考に、改めて検討していきたいと思っている。本市の図書館でそのレイアウトをした場合、おっしゃるとおり圧迫感が出たりといった形になるのであれば、検討し直す必要があるのかなというふうに思うので、今後レイアウト的なところで、他の方法で対応できないかといったところも検討していきたい。次の〇〇してはいけないというところで、食べ物を認めるのは難しいのではということについては、やはりいろんな意見を図書館からもいただいており、慎重にということもあるのは存じ上げている。今、具体的に食べ物をどこまで解放するかまでは決めているわけではない。飲み物については、蓋がつくものであるとか、そういったようなものについては認めるといったルールを考えながら開放していくような形で考えたいと思っている。このことについては、図書館の館長からも慎重にという意見をいただいているので、慎重に進めていきたいと考えている。司書の派遣の際に図書館と学校の図書室で利用の仕方が違うと混乱するのではということについては、図書館のルールは学校の図書室とは違う部分があるということも含めて、利用の方法について改めていろいろと教育をしていただく形になるので、それを踏まえて図書館の利用になるべく繋げていきたいということもあるので、図書館の利用方法についての教育も併せて行うように、司書の方たちをお願いをしようと考えている。

高橋

このコンセプトシートと基本構想については、図書館の館長と指定管理者で

ある直方文化青少年協会と打ち合わせを重ねて作成している。基本的には、サービスなどのソフト事業について、図書館の館長の意見を濃く反映したような形になっている。特に〇〇してはいけないをなくすというところについて、そこを一番気にされていて、食の方をどこまで緩和するのかというところは、慎重に協議というふうな意見を受けている。

市長

いろいろいただいた意見、お尋ねになった上で、少し疑問が解けた部分もあるかと思うが、まだコンセプトを通じてこれから具体的に落とし込んでいくプロセスの中で、今いただいた意見をどう反映させていくか。館長によると、直方の図書館は、県下では利用者数も含めて全体的には中くらいのレベルではあるが、特徴として、**140**名を超えるボランティアの方がいらっしゃるということで、これは他にない直方市の図書館の特徴だということであり、市民の皆さん方に図書館を支えていただいている。その良さを失わないように、これから図書館がより市民に身近なものとして存在するようにしないといけない。図書館は作って間もなくから雨漏りしており、早急に改修を行うよう指示をする中で、せっかく改修するのであれば、どうやって中身を現代に合わせてやるか。ただし、予算が限られた中でどうやって、ソフト面を含めて、今の時代に合わせたような図書館の在りようというのをこの中で実現するかということで、担当課で協議をして、今のようなコンセプトになっている。もう一点、図書館そのものが、登録者数でいうと、人口に対して**75%**ぐらいが登録していることになると思うが、貸出冊数はあまり多くなく、蔵書数と比べてもまだまだ伸びしろは十分あるので、それをしっかりと使っていただくようにどうするかということが問われていると思っている。また、今、蔵書を増やそうにも本の値段も上がっていて、予算も頭打ちしていると冊数はどんどん減っていく話になるので、何とか中身的なものも充実させないといけないということと、今の時代でいうと電子図書みたいなもののニーズも高まる中で、どうやってそのプラスアルファとしてのサービスを、中身を充実させるかということも課題だと思っているので、これから教育委員会、教育長ともしっかりと話をしながら、そういったものも充実させていきたいと思っている。本の返却については、担当の方に管理のあり方も含めてしっかりと検討させる。せっかくの機会なので、いろんな意見を反映させて図書館がより身近なものとして、直方市における知の拠点として利活用が進むように、これからしっかりと協議をしてやっていきたいと思っているので、この機会以外にも、お気づきの点があれば意見をいただきたい。

(2) 中学生・高校生海外派遣事業について

○事業概要について

- ・事前説明会の参加者数
 - ・対象者、派遣先、派遣期間、派遣人数、参加料
 - ・応募条件、選考方法
 - ・プログラムの内容
 - ・昨年度参加者、引率者の声
- ※詳細は資料参照

【委員の意見】

阿部委員 報告会を拝見して、面接のときよりすごく成長されているのにびっくりした。一点、プログラムの行程が結構忙しいと感じるので、昨年参加した子どもたちに、この時間をもっと長く取りたかったとか、そういうふうな行程に対する意見を聞いていただけたらありがたいと思う。

篠田委員 フィンランドは、すごく恵まれた環境の中で、国民全ての社会保障がしっかりしてる反面、消費税とかがものすごく高いというふうに聞いている。その辺りのことも実感として体感できるような時間がプログラムの中であれば、これだけの学びができる背景には、そういう税金というものがあるんだということ学ぶのも、とても大事な時間なのかなと感じた。もう一点は、せっかく西小学校がアントレプレナーシップ教育を積極的に行っている中で、昨年派遣された先生は、中学校の先生が 2 人ということで、限られた人数の中である程度そういうものを持ち帰ろうとするなら、西小の先生が 1 人参加されておくというのも、限られた投資の中でより効果を出すという意味では一つの方法でもあるのではないかと。

市長 今回は中学校と高校で、引率の先生は何名の予定か。

守田係長 中学校の先生 2 名を予定している。

市長 私も、先に取り組んでいる西小学校で学んだ子どもたちが、中学、高校とどういふ変化が出てきているのかというのをしっかりと見た上での在りようというのものもあるかなというのと、最初やるときに、できるだけ学校現場にもう一回持ち帰って、そういう視点で教育現場に、文科省がやる一定のルールに基づいたやり方とはちょっと違った、こういうアプローチをしたら面

白いなというようなものを持ち帰ってもらいたいので、できるだけ先生に行ってもらいたいという話を当初からして、前は2名行って、また裾野を広げるという中に、今篠田委員言われるように、小学校の先生が行くのも、教育現場に生の現場を見るという話は参考になるのかもしれない。

内藤委員 プログラム内容については、素晴らしいものだなというふうに思うが、市としてこれをやるということについて、効果をどう計るのかということとはしっかりと考えておかないといけないのではないか。それをどう把握するかというと、もうこれはやり続けるしかない。10年やって、10年後にその子どもたちがどうだったかというのを検証しないことには答えが出ない。そして、その子どもたちが10年後にどうなったかというところは、なかなか難しいのかもしれないが、仕組み的にそういうのが拾えるようなところも持っておかないと、この事業を市としてやる以上、やりっぱなしということではいけないと思うので、何かしら仕組みとして、この子どもたちがどうなったか。まず、西小のアントレプレナーシップ教育を受けた人たちがどうなっているのかということとは、やはりそれを検証することによってこの事業というのがどうだったのかというのが、初めて分かってくることだと思うので、非常に良い取り組みだからこそそこはしっかりとやる必要があるので、5年後、10年後に話を聞けるような仕組みを入れていた方がいいのではないか。続けないと意味ないと思うので、今後もやり続けられるように、そういったところを仕組みとして入れていただきたい。

市長 内藤委員言われるように、思いつきでやり始めて、何か成果を見ないうちにまた変わるたびに変化していくというのはあまり良いことではないし、教育に投資をして、リターンをあまり短兵急に求めてもしょうがないところがあって、今回、高校生まで対象を広げたことは、高校生だとおそらく職業選択とか進学のところ、中学生よりももう少し現実的に世の中というものを考えて、変化が四、五年程度である程度見える話になるのかなとも思っていて、今回試しに対象を広げているので、それを継続しながら、それを何か地域に還元しろとかいうときりがないので、やっぱりここは子どもを育てようという形の中で海外体験、限られた人ではあるけれども、だからこそ、それなりの思いを持って行く人たちであってほしいというものもある。そのことが地域の子もたちも体験が自分の人生によりリアルに生きたものとして、進路選択とかで、そういうリーダーシップを発揮しそうな人たちが、前は多くエントリーされていたのかなと思っている。彼女、彼らがどう変化をしているかというのを、事業実施側として見ておかないといけないと思っている。

そのことをどう現場にもう一回フィードバックさせるかということが大事だと思っている。

中野委員 私も 12 月の派遣団員報告会に参加させていただいた。皆さんが日本と異なる文化や価値観に触れて、視野を大きく広げられて、また非認知能力とともに新しいことに挑戦することで自己肯定感が高まった。そういう成長の姿を拝見させていただいたので、とても良い事業だと思う。ただ、中学生の募集要項の中で、地元の中学校、直方市立の中学校に通っている子どもに限定していただきたいというのが一つと、フィンランドと日本は 6 時間の時差があるので不可能かもしれないが、ちょうど日本では夏休み期間になるので、登校日に合わせてフィンランドとインターネットで繋いで、オンラインで生の様子をやりとりする時間が作れたら、行けなかった子どもたちに夢を与えられるし、また行きたいという高校生も、このまま続けるとしたら挑戦してくれるかなと思って、そういう時間が作れたらいいのではないか。それと、この募集要項を見て、一度体験された方、一応一年生から三年生までと期間が長いので、一度体験された方は二度目の応募は駄目っていうことになっているのか。そこを謳ってないので、できればそれも入れたら誤解がないのではないか。

市長 今、中野委員の言われたのは、今回の募集の段階ではまだ、中学生でいうと、市外の中学校に行ってる人たちは、今回は応募が可能だったという話でいいか。

林課長 はい。

市長 私もできるだけ現場でこの子は何か、昔でいうと篤志家が、この方にはそういう機会をやったらさらに伸びていくかもしれないと。それは家庭の事情とかいろんなことで、海外とかいうと親も行ったことないのに何を、という話すらあるかもしれないということを考えれば、できるだけ周りでもそういう意味での人の育て方を、少し範囲を広げながらやっていくことが必要かなと思っているので、いろいろ一年、二年と重ねることで、今言われるようなところの仕組み作りも、しっかりと確かなものにしていければと思っている。

教育長 先ほどの過去に参加した方に関しては、市のこういう事業に応募した者は、応募できなくなっているで、続けて何回もということにはならない。最初の図書館の方も、キャッチフレーズという話も出たが、今度一番大きく変わる

のは何かとなったときに、何々してはいけないというのをなくすということが一番インパクトが大きくて、大きく変わるんだなど。これが変な独り歩きをして誤解されると、悪い意味でのイメージが大きいというふうな話になってくる。委員も言われていたように、学校ではそういう指導をしてないというところもある。そういう、何々してはいけないをなくすというよりも、こういうことは少し許可していくという流れなんだというようなところを逆に表に出した方がいいかなという気がしている。それと、海外派遣に関しては、小学校の先生を引率にということもあるが、今、中学生が中心であり、中学校の先生のほうが対応がしやすいだろうということもある。今度高校生に広げるが、ただ、教育委員会は、高校は管轄外なので高校の先生に出張命令を出すわけにはいかないというのものもあり、その辺いろいろ検討しながら、また進めていきたいと思っている。

市長

今日大きく二点、それぞれ各委員の皆さん方からいただいた分について、私も市長部局あるいは教育委員会の方で議論をしながら、図書館については特に、一旦形を作ってしまうとなかなか動かさない話にもなっていくので、慎重に対応していきたいと思っており、いずれかで我々が教育委員会と話をして整理した内容を報告する機会を、総合教育会議ではない形でも、作りたいと思っている。それで今日の意見を拝聴することについては了解をいただきたいというふうに思っているので、よろしく願いしたい。結果として教育大綱にある未来を拓くという意味での事業の枝葉の一つかもしれないが、最終的に内藤委員が言われるように、長期スパンで見て、子どもたちの育成の機会を提供しながら、より生きる力を付与していけるかという事業の一つだと思っているし、本屋が少なくなっていく中で、子どもたちが本に触れる機会をしっかりと確保し、読書量を増やすということも大きな意味での学力の向上にも、あるいは生きる力にも繋がっていくと思っているので、しっかりと地に足がついた政策として展開をしていきたいと思っているので、引き続きの支援をお願いして、私の最後のまとめとしたい。ありがとうございました。

○次回開催について

開催なし

5. 閉会

上記のとおり、直方市総合教育会議運営要綱第9条の規定により会議録を作成した。

この会議録は、会議の要旨に相違ないことを証する。

令和7年5月26日

直方市長 大塚 進弘